
パーティ組んでるのになんか色々偏っちゃうことってあるよね

evangeline

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パーティ組んでるのになんか色々偏っちゃうことってあるよね

【Nコード】

N4031BA

【作者名】

evangeline

【あらすじ】

主人公は弱い。

よくあるチート能力なんて持ってない。

主人公はある日、高校生としての日常から非日常あふれる世界へとふざけた神様によって飛ばされた。

飛ばされた非日常溢れる世界は魔法が行われ、魔物が都市を襲い、そして人間同士は人間同士で、領土を広げるために争いを繰り広げる世界。

戦争が当たり前の世界。

そんな世界で糞弱い主人公が、この世界でも稀にしか居ない癒者^{ヒーラー}としての能力を使用して、偏ったパーティーを組んで、なんとか細々と（本人談）生きていく物語。

く序章く（前書き）

この作品は第二回目の投稿であります。

処女作については、途中ではありましたが、諸事情により急遽消去しました。

ウワアア――――。。（、、。）。――ン!!!!!!
読んでくださっていた600弱名ほどの方々には誠に申し訳ないの
ですが・・・

ただし、今回の作品については消去することは無いと思います。
ただ、この作品には途中、意味の分からない描写が入ると思います。
しかしそれも含めて伏線として行きたいと思ってます。

もし、途中でもややもやるのが嫌な方がいらっしやいましたら、完
成後にお読みいただくことを作者としておすすめて頂きます。
それから、どうなるかはわかりませんが仕事がつっても忙しいため、
投稿が遅れることもあるかもしれません。

その時はごめんなさい。m(――)m

（よし、先に謝ったし無断で遅れてもこれで何も言われまい）
では、駄文ではありますが、どうぞ世界の道理ことわりを超えた世界へ。

〈序章〉

俺の名前は「佐々木 レオ」という。

これは父親のお祖父さんが、イタリアに昔いたことがあるそうで、お祖父さん、俺にとつての曾祖父の親しい友人が「レオンハルト」と、言うそうで、その話をいつも聞かされていた父親が、煩い曾祖父を黙らせるため、それをとつて「レオ」にしたのだという。

・・・なんじゃそれ。命名された理由が悲しすぎる。
だからそれは無視することとする。ていうか無視したい。

そして、曾祖父がイタリアに居るときに、曾祖母と出会ったらしく、
とっても綺麗な背の
高い、イタリア人女性を日本人の曾祖父が妻に娶ったそうなの。

そして、28歳の時、俺の父親を生んだ。

父親は曾祖父の血が濃かったらしく、日本人らしく、黒髪黒目で若干潰れた鼻、しかしそれなりに整った顔立ちをした形で生まれてきた。

順調に父親は育ち、25歳の頃に、俺の母親と出会い、そして2年後に俺が生まれたそうなの。

そうして生まれた俺は、曾祖母の血を一代飛び越して色濃く引いたらしい。

生まれた時から金髪、青い目、スラリと高い鼻。

だが、顔の骨格が日本人らしい角張った形で生まれてきた俺は、幼

稚園の時から、（特に女子に）人気のある園児だったらしい。

そのときあたりから俺は頭だけは良かったらしい。
だが、運動は全くダメだったそうだ。

走れば他の男子に負け、喧嘩をすれば一方的に殴られていることになっている。

自分も殴り返してるつもりなのだが、全く相手に当たらずに、当たってもダメージを与えられてないのだそうだ。

自分で言っておいてなんだが、悲しすぎる……。

だが、なんだかんだ言って、小・中学校も、無事に（色々ありすぎて五体無事であったことが未だに信じられないが）卒業し、高校へと入った。

その高校では1年目にして上級生、同級生がファンクラブをつくるわ、さらには毎日10通は下駄箱にラブレターと思しき物が入ってくる始末。

毎日朝からそれを処分する。別に捨てるわけではない、（親の教育の賜物なのかな）そこまで酷い事はできないので、きちんと返答を書き記して、（あ、付き合うことはできませんって内容ね？誤解のないように言っておくと、だけど。）それを相手の下駄箱に返却してということをしているような日々が3年間続いて、（今思い出せば、下駄箱に返しておくと、さらにその返答が来ていることあった。なんだか文通になってるような節も無いではなかった。）

そんなこんなで、ぐだぐだと惰性で2年と11ヶ月を過ごしてきた。

小・中・高校生活は振り返れば長かったようで、過ぎ去ってしまえば短かった。

これから大学へと進学するにあたり、より多くの女性に目を付けられるんだろっなあとか思いながら、卒業式の日を迎えたのだった。

でも、普通に過ごしてきた俺には信じられないけど、この卒業式が、人生のターニングポイントになるなんて、全く思わない、お気楽で鈍感な俺なのであった。

・・・いや、俺は自分では鈍感だと思ってるわけじゃないことだけはとりあえず言っておく。

ゝ序章ゝ（後書き）

読みづらかったので訂正させていただきました。

卒業式（前書き）

今日は、この作品の初投稿ですので、大盤振る舞いで2話もUPさせて頂きます。

卒業式

高校生活最期の卒業式。

俺は卒業式が終わると共に、速攻で家へと帰宅する。

別に涙を流すこともなく、友人と別れを惜しむでもなく、下級生の女子に制服のすべてのボタンを剥ぎ取られて、逃げ帰ってきた。

・・・いや、あれはもうおかしい。下級生含めて同級生も（・）だが、女子の様子は、猛牛でももうちょっとおとなしいんじゃないかってくらいの勢いだった。

卒業式終わってすぐに校庭とかに下級生が並んで花道作ってくれんじゃない？

卒業生として列の最後尾だったんだが、終わって校門を出た瞬間に女子が80名ほど押し寄せてきた。

俺の周囲5mは完全なる肉壁だった。

なんかえっちな響きだけど、この光景を見たらえっちなとは思えない。

だって俺、その中心で押しつぶされているんだもん。

おしくらまんじゅうして、その中心で押しつぶされる人間的な感じ。

俺に密着している女生徒は、忘我の表情を浮かべている。

こいつ、危なねえ・・・とか思う暇すら無い。

押し寄せてきたと思ったら、一斉に手紙と花束を手に押し付けられ

た。

それぞれ口々に別れを惜しむ事を述べていたようだが、はつきり言
つてキヤーキヤーとうる

さすぎて、何を言ってるかは聞き取れなかったけれども、聞き取れ
たうちではこんな感じ。

「レオ様私の愛を受け取ってえええええ！！」

「レオ様私も　　大学へ進学しますっ！！」

「レオ様行かないでえええっ！！」

「レオ様あああ！！」

「レオ様、キスしてくださいいい！！」

「レオ様、私を天国へ連れて行ってえええ！！」

「レオ様私のパンティを受け取ってええええ！！」

・・・いや、確かに最後の方はオカシな言葉が聞こえてきてい
たけれども、これらはきつと冗談なんだろう。ていうかそうであっ
て欲しい。

うん、まあ、これらの言葉は基本的に無視していたから押し付けら
れる花束やら手紙やらは作り笑顔を浮かべて受け取っておいた。

途中、押し付けられる物の中にパンティとか、ブラジャーと思しき
布切れとかあったけど、それはさり気なく捨てた。

卒業式の日くらいは笑顔で彼女たちと別れたかったから、笑顔で捨てた。

だってそんなもん受け取った日には全員が脱ぎだしかねないもん。それは勘弁して欲しい……。

それでも俺は平和を望んでいるのだ。

だから今まで彼女も造らずに無難に高校生活を過ごしてきたんだし。

ちゃんと、話しかけられれば答えは返す。

けれども、この顔のせいで本当に友達と言える友達は出来なかった。

彼女らは、ただの取り巻きでしかなかった。

らは頭がよい俺を使うだけ、女子からモテる憎い存在としか見ていなかった。

そう、ただの一人として、俺を対等にみてくれる人なんて誰も居なかった。

だから、大学に行ってもそうなるんだろうなとか思っていた。

でも、そんな人生は嫌だった。だから淡い希望も抱いている。

大学行ったら友達作るっ！！

でも、現実問題として、小・中・高校生活では友達がいなかった。

だから俺はネットの世界へと走った。

ネットの世界では友達がたくさんできた。

ネットの世界では顔なんて関係なかった。

だから家ではネットの世界へと溺れていった。

ただ、現実でもちゃんとした友達が欲しいと思っていたから、いろんな人と友だちになれるように努力していた。

だけどそれらは、報われなかった。

だから、こいつらとはここでお別れだ。

高校を卒業すればコイツらとはお終い。

コイツらとはおさらばをして、大学で友だちをいっぱい作ってやるッ！

そんな事を思っただけで笑顔で花束をもらい、手紙を受け取り、下着を受け流して捨てていた。

だが。そんなことを思っていたのが悪かったのだろう。

1m離れていない女性とから、とある文句が拳がった。

それは一般的な男子生徒からすれば嬉しい言葉だったに違いない。

俺だって少しだけ、ほんの少しだけ嬉しかったもん。

ああ、普通っぽい感じでいいな、って。

でも、その女生徒が言い出したことが俺を地獄に墮とした。

「先輩っ！！第一ボタンくださいっ！！」

一瞬で周囲から音が消えた。

さっきまでキャーキャーとうるさかった女生徒達が、シン、と静かになる。

俺は偽の笑顔のまま、周囲を見回す。

校門前の家の人が急に静かになったのに様子を見るためなのか、俺の右側のほうで、大きな音を立てて、窓を開けた。

ガラガラガラガラっ！

周囲に響き渡る音。

女生徒80名程、含む俺がそちらの方へと一斉に振り返る。

なんかよくはわからないけど、ステテコ履いた、おっちゃんだった。

窓開けた音で、全員が振り返っている。

それにビビったのか、急いで窓閉めるおっちゃん。

高校の向かいって厳しい立地だよなあ・・・とか、意味もなくて思っ

た。

すると。

ブチッ！！

嫌な音が目の前でする。

急いで目を前に向けると、ボタンくれと叫んだ女生徒が、肉壁を腹にして、コチラに身を乗り出すようにして、手を伸ばしていた。そしてその手に握っているのはボタン。

あ、やばい。

そう思う暇があったかどうかすら疑わしい。
声が爆音の様にして戻ってきた。

「ずるいつ！！私もレオ様のボタンもらいますっ！！」

「あ、てめえ、何やってやがんだっつつつ！！私のボタンをとってんじゃねえええつつつ！！」

「おい、てめえ、何してやがる！！袖口のボタンは私のだぞっ！！」

「レオ様の時計は私のものだあああっ！！」

っ！！俺の2000円の時計がっ！？

ただ、ズボンは半ズボンへと化し、長袖があるはずの制服は、Yシャツ一枚で、前を留めるためのボタンは一つもなく、生まれて初めてのパンクな感じの服装で家に息を切らして帰ったことだけは伝えたい。

俺の制服は無惨なんてもんじゃないかった。

家が女生徒達の暗黙のうちに取り決められた不可侵領域でヨカタ・・

卒業式（後書き）

もし、感想などを頂けるのであれば投稿スピードが上がるかもしれません。

あ、でも上がらないかもしれません。

どっちなんでしょうかねえ？w

作者もどうなるかはわかりませんが、

是非とも、訂正すべき点などがありましたら、感想や、誹謗中傷なども含めてご意見をお待ち申し上げております。

また、すべての感想に対する返答は控えさせていただきます。

ご了承ください。

母親

家に帰ってリビングに居るであろう親にリビングの外から声をかける。

「ただいま」

・・・返事がない。

多分どこかに出かけているんだろう。

ま、いつか。ボロボロの制服を見下ろしてため息を堪えつつも、まずは洗面所へ。

手を洗ってうがいは、小学生でも当たり前のようにすることです。風邪を引かないように、予防をしましょう。

まあ、うがいは喉に張り付いた細菌にどれだけ有効なのか、わかってないんだけどね。

でも、物理的に洗い落とすことはできるから、これもしっかりと・・・。

・・・ガラガラペツと。・・・よし。

俺は帰ってきてから手も洗わない不衛生な奴は嫌いだ。

これは、親から幼稚園児の時に徹底的に躾けられた。

ここまでやって、二階にある自分の部屋へと向かう。

まだ、午後になったばかりなのに、既に疲れきっていた。

あゝ・・・昼寝しよつかな・・・

そんなことを思いながら階段を上がり、破れまくってる制服を脱ぎながら自分の部屋のドアを開ける。

ガチャ・・・キィ、パタン。

・・・俺は自分の部屋へ入れなかった。

ドア開けて、その場から動けずに再度ドアを閉めさせてもらいました。

ドアって嫌なものから目を逸らす事もできる、ウルトラ便利アイテムじゃん。

そんなくだらないことを瞬間的に思った。

すげー。ドアって偉大だ。

半裸エプロン（下着着用）でエプロンした母親が俺のベットで寝てるのから目を逸らせてくれたよ。

ドアって偉大だな。

さて、まあこういう時の対処マニュアルは俺の中でバッチリある。対処マニュアルを頭の中でスクロールさせる。

えーと。

『第1390項：女性が裸エプロンをしていたときは。

家に帰ってきたときに女性が裸エプロンしていたときは、まずは褒めましょう。

褒めちぎると、次に顔を赤らめながらこう聞いていくはずです。

「お帰りなさいませ、アナタ。お風呂にします？ご飯にします？それとも……」

ワ・タ・シ？」

ここまで来たらあと少しです、アナタはこう答えればいいのです。

「もちろん、お前だ」

ここは凛々しく格好をつけてセリフを言きましょう。囁むのは厳禁ですし、

どもるのもいけません。

注意をしましょう。

そうして女性をお姫様抱っこしてベットへと連れていけばあとは野獣になれます。

さあ！これでアナタも彼女をGET！」

「……母さん？何をドア越しに言ってるのかな？」

『あら？あなたの頭の中にあると言われている「幻の彼女とのイチ

ヤイチャ日常キャツ

キャウフフ読本」に書いてあったことを読んだだけよ?」

「ッ!？」

思いつきりドアを開けながら叫ぶ。

「なぜ母さんがその本の所在を知っているっ!？その本はバレないように今は使われて

いないアナログTVを分解して隠しておいたはずだっ!？」

「あら、お帰りなさいませ、アナタ。お風呂にします?ご飯にします?それとも・・・

ワ・タ・シ?」

サラッと俺の言葉を無視されたので、できる限り冷めた声で言う。

「息子を喰う母親がどこにいる」

そいつって軽くチョップをかます。

「あら、母親を喰う息子ならワタシの目の前に居るじゃない。この前だって昼となく夜と

なく勉強に付き合ってあ・げ・た・の・に」

「俺は母親食ってねえだろ!？それに勉強は確かに昼から夜まで教えてもらったが、

学力向上のための真剣なものだっただろうが!？」

「近所の誤解を招くようなこと言ってるじゃねえっ!!」

そこまで言つと、俺の思いっきり息が切れていた。

まあ、運動できないし肺活量もそんな多い方ではないのじゃないと、俺は諦めている。

だが、そんな俺をじっと見つめる母親。

「……なんだよ、母さん？」

なんか目が虚ろだ。なんだろう？

「……いやあ、そこまで肩で息をするほど自分の欲望を抑えなくてもいいのになって思つて」

「ツちつげえええええええええ!!」

生まれてここまで叫んだことはないっていつくらいには叫んだ。

そしてそのまま母親のエプロン掴んで部屋から引きずり出しましたとき。

いや、まあ、引きずりだすときに若干エプロンがずれて下着が見えたりしたけれども。そこは親ですから欲情なんて一切しておりません。

「……断じて。決して。誓つて。命を賭して。」

「……まあ、欲情したかどうかなんていうのは脇に置いて。」

こんな感じが、ルックスがどうこう言われている俺と母親の普段のコミュニケーションであった。

そんな母親を引きずりだして真っ先にパソコンの電源を立ち上げる。電源を立ち上げている間に制服を脱ぐ。

と、そこで気づく。制服ボロボロじゃん……。

ていうかなんで息子の性欲について興味津々の母親が俺のパンクな格好になってる俺の制服について、何も言わないんだよ……まずツッコむべきはそこだろうが！

そんなことを思いながら隣に立つ誰かに空中でなんでやねん！的な感じで手を振る。

ポヨンっ

そんな擬音とともに何かが手に触れたので横を見ると……

「きゃっ。母親の胸を揉みしだくなんてダ・イ・タ・ン」

「音もなく息子の横に立つんじゃねえええええ！！そして俺は揉みしだいてねえだろがあああ！！」

思いつきり母親のFはあろうかという胸にツッコミを入れてしまいましたとき。

……笑えねえー……

母親に色気があるのは大いに結構。だが息子にその色気を向けないで欲しいものだ……。

まあ、今度は母親との漫才をつつけるのも面倒なので、そのまま後ろへと押し出してドアを閉めて、鍵をしっかりと締める。

なんだかんだ言って制服が脱げてないし、帰ってきてから10分以上経っていた。

ため息をつきつつ制服を脱いで部屋着へと着替える。

思えば、2年くらい前から家族の前ではこんな感じのノリになっていんだけどかとか思いながら部屋着を装着。

2年前といえば、ネットゲームとかを始めた頃だったなあ・・・と懐かしむ。

あ、やばい。周囲からめっちゃカッコイイとか言われてる俺がじじ臭い考えをしている。これは早急にパソコンで解決せねば！！

そんなことを無駄に一人でテンション高いままパソコンの前へと座り、一ネット（情報）の海へと一潜って（繋げて）いくのであった。

母親（後書き）

あー・・・。

なんなんでしょう、このPV数わ・・・。

投稿してたったの半日でPV5000とか、ユニーク100とか・

・

（なんかめっちゃ鯖読んでました・・・読みなおして気づいてビツ

クリです・・・。グーグル入力のお陰で自分の鯖読みにすら気付か

ないなんて・・・。誰か何か言って欲しかった・・・。実際にはP

V500、ユニーク100by2012,1,11）

処女作の時とは大違いで、作者ガクブルでございます。

（でも嬉しかったのでかなり早めに投稿しちゃったりした現金な作者）

それだけ見てくれてる方が多いのでありましようか？

いや、ありがたい限りではありますが、なんだか恐ろしいです。

作者がこの作品を捨てた時とか失敗した時とかスランプになった時とか

その他諸々諸々・・・。

（諦めるのも想定してる最悪な作者）

それだけの方が、

「あ、コイツ結局はダメなやつだったんだなー。ま、想像してただけ。」

みたいな反応をしてるかもしれんと考えると恐ろしい限りです。

反動で仕事やめて自宅警備員に転職してやろうかとか考えてしまうほどです。

（被害妄想酷しな作者であります）

・・・自分で書いていてうざったい後書きですね・・・。

ま、こんな作者であります、感想とか誤字脱字ですとか、矛盾点とかそういうのがありましたらどうぞ送ってやってください。

作者は喜んで投稿をスピードUPしちゃうかもしれません。

・・・あ、あと読者一体型小説を目指してもいいのかなと思っておりますので、ストーリー展開を作者に指示してくれたらそれを反映させてしまうかもしれません。

（他力本願丸見えな作者ってひどくね？）

睡眠とは現実との別れ

母親に絡まれてからネットを徘徊すること15時間半。

パソコンを立ち上げてから1時間ほどは不特定多数の人間とチャットをしていた。

その最中に新しいRPGゲームを紹介された。

そのRPGを紹介してくれたのは「じーおーでいー」さんっていう人で、ネットゲームに精通しているのだそうだ。

「じーおーでいー」さん曰く、このRPGをしている大抵の人間はおもしろすぎてハマり込んでしまうため、

チャットに二度と帰ってこないんだなんて話をしていた。

たまーに帰ってくる人もいるらしいが、やり込みすぎて体を壊しかね無いことから、自分に区切りをつけるために辞めたという人間もチャット内にはいた。

やったことのある人間曰く、飽きることがないんだそうだ。

ゲーム内ではナイト、魔導師、ファイター、鍛冶、農民、等々の多種多様な職種があり、更には人間以外の異種族、エルフとかドワーフとか、犬族、猫族とかが存在しており、それらを一番初めに選択して、ゲームを進めていくらしい。

一番初めに選んだ職種、種族等によってストーリーが変化し、更には進めていくうちの選択肢にもよってストーリーが変化するとかで、更にはパーティを組めるらしいのだが、組んだ種族、職種によってもストーリーが変化するのかなんとか。

だから公開されてから、1年半、全てを攻略した人間はまだ誰も居

ないんだとか。

それを聞いて思った。

フラグがいくつあるんだよ・・・ていうかネットゲの域を超えてね？
絶対無理ゲーの域を超えてるだろ。って。

でも、ゲーム名を調べてみて検索がヒットしたので公式ホームページへと向かうと、無料でできるらしかったのでネット上でメールアドレスとかなんとかを送ったりして登録やらを済ませて、キャラクターを作成して進めてみた。

ダウンロードが必要ないとかで、それも人気に火をつけてるんだろ
うなあとか思いながら始めてみる。

第一章

そんな文字が画面中央に出てきて、RPGを始めた。

途中、第一章だが、分からないところなどもあつて、チャットや攻略ページなどを見ながらすすめていたのだが、全部で15章まであるらしいということも分かった。

じゃあ、とりあえず1章進めてみるか。

なんてことを思っすすめてみました。

そうしたら第一章が終わった時点で15時間半とかつていう時間が経っていた。

何気っていうか、無理ゲーとか思ってたのにめっちゃめっちゃ簡単で、
尚且つストーリーが凝ってるんだもん。

時計見てめっちゃびつくりしました。はい……。だって朝方の4時に近い時間になってたんだもん……。

ぶっ続けでやりすぎた……。

これはもう、目が赤くなっているであろうことは想像に難くない。すると、見計らったかのように腹が鳴り出した。

やっべえ……。昨日の昼からなんにも食ってねえんじゃん……。ある意味すげえな、このゲーム……。

なんてことを思いつつも、とりあえず休憩を入れることにした。

……。休憩ですからね？まだ俺はやる気満々ですから！この際、第一章で組んだパーティとか更にレベル上げとかしておきたいしねー。

そんなことを考えながら、一階へとそうつと降りていく。廊下を通ってリビングに入ると、何やら台の上に食事がおいてあり、その上に紙がおいてあった。

ゲームのやりすぎ！！

呼んでも降りてこないし、お母さん寂しくって死んでしまいました。た。

息子が母親と父親と一緒に御飯も食べないような子になって、お母さんは残念です。

だから死んでしまいました。

もし、お母さんを生き返らせたかったらお母さんを孕ませなさい。あと、庭はきちんと説得しておくように。

それからご飯はちゃんとチンして温めてから食べるように。

・・・紙は、くしゃくしゃと丸めてゴミ箱へと投げ捨てた。

ていうか親父は何をしてるんだ。妻の息子へのセクハラを無視してんじゃねえ！

おかずをレンジへ入れて温め始める。

その間にふと考えてしまった。

書き置きの上4行はきつと俺がゲームのやり過ぎで疲れたんだろ。

絶対そうに違いない。じゃないと親父がアレを見過ごすわけがない。いやあ、ゲームのやりすぎって嫌だねえ。

・・・あ、・・・。

ちよちよちよ、ちよつとまてええええ！！

俺がゲームやりすぎて見間違えたにせよ、俺が母親孕ませる事を望んでるみてえになっちゃった！！

やっぱやりすぎて見間違えたんじゃないかって書いてあってくれエエ！！

なんて事を思いながらゴミ箱から紙くずを拾い出して紙を伸ばす。読みなおして安心する。

ふう・・・。ちゃんと書いてあった。

よかったよかった。

やれやれ、自分で考えておいて母親孕ませたいの事を思ってる、ウルトラマザコン的なしかも一番やつちやいけないことをする人間になるところだった。

危ない危ない。

・・・まあ、よくはないんだけどね。

なんて一人漫才をしつつ冷や汗をぬぐって、読みなおしてから気付いた。

『あと、庭はきちんと説得しておくように。』

・・・？庭を説得？

・・・意味が分からん。

庭を説得ってなんか庭が生きてるみてえな言い方だなあ・・・。

・・・そんなわけないか。

あー・・・なんか寝ぼけてんのかな。

こんな遅くまで起きてたことないし。

チンッ

お。温まったみたいだ。やばい。超良い匂いする。

「いただきまーす」

小声で挨拶をする。

うん、うまい。

あー・・・なんか物足りないなあ・・・ふりかけかけちゃおうっと。
んー・・・うまっ！

あゝ・・・幸せだ・・・。

ガタッ

・・・な、なんだ？今、庭のほうで音がしたか？

そつとカーテンを捲る。

そこにはおどろくべき光景が広がっていた。

・・・3人ほどの女子生徒が庭でミノムシのように何かにくるま
って寝ていました。

・・・びっくりした。いや、もうまじでびっくりした。
今までこんなことなかったもの。

ていうか何？これ？

俺の家って女生徒達の不可侵領域じゃなかったのか？
いやいやいや、ていうかなんで寝袋に包まってんの？
なんでテント張ってる人までいんの？

ていうかテントの中は一人・・・だよな？

いやいやいやいやいやいや・・・

でも、ほつとけないよな・・・。

あのままじゃ可哀想だ。

あんなふうな女子は外で寝るもんじゃない。

それくらいは普通にわかる。

だから、帰るように説得することにした。

・・・あ、庭を説得ってこういうことか・・・。

ていうかなんで自分へのセクハラさせる内容がアレだけ詳しく書い

であるのにこの女子たちへの説明が
一個も詳しくかかれてないんだよ！！
しかも日本語間違えすぎてんだろ！！
でも、外の女子たちも寒いだろうな・・・
今日くらい家の中に入れてやるか。
とか思いつつもちゃんと玄関へと向かう俺。
靴を履いて庭へと向かうと、寝袋にくるまる女子生徒たちは制服の
ままのようだった。

一斉に起こしてきゃーきゃー言われんのも面倒だな。
近くに居る女子からひとりずつ行くか・・・。

そう思っで近くに居る女子を揺り起こす。

ガバツという感じで上半身だけ起こすと、周囲をキョロキョロし始めた。

俺は真後ろに立つ形になってしまった。
しょうがないないので肩を叩いてみた。
女性とが振り返る。

近所迷惑になるのも嫌なので、自分の指先を自分の口元に持って行き、静かにするようにジェスチャーで伝える。

・・・バタアツ・・・

なんか女の子の口と目が丸く開いたかと思うと後ろ向きに倒れた。
気絶したっぽい。

それ以降2分ほど揺り続けたが起きなかった。

・・・一体全体なんなんだろうか・・・。

他の女子2人も先ほど同様、「揺り起こしてコチラを見つければ
ったり倒れてしまった。

・・・ホントになんなんだろうか・・・。

テントの方は無視することにする。

きつと寝袋にくるまってるやつより暖かいだろうしな。

もういいやと諦めて家の中へと入る。

俺は楽観主義なので、絶対無理なことはしないし、やらない。

困ってるひとを見ると、ちゃんと助けなくなる。

でも、その人が困ってないって言うなら助けないし、本人が望んで
困った状況に置かれているならそれを助ける必要はないと思ってい
る。

今回もその一例。

彼女らはきつと道路かなんかでたむろしていたんだろう。

それをうちの母親に見咎められて、テントと寝袋をあてがわられて
道路じゃ邪魔だろうから庭に通されたんだろう。

覚悟の上でそうしたのならこれ以上はもう彼女らに関わることはな
い。

いや、だって一応、一回は起こしたんだぜ？

でも気絶して起きなくなっちゃったし、しょうがないだろ？

うわー・・・眠い・・・

家に入り、時計を見ると既に5時半になっていた。

飯の途中だったので残っていた飯を掻きこむ。

茶碗を水に漬け込んでキッチンにおいておく。

眠気が絶頂だったので二階へとたどり着いて、そのままベットへ倒

れこむ。

・・・・あー・・・目覚まし掛けなくちゃ明日日が出ているうちに起きられないかな・・・

なんてことを思いつつも意識がスウツと音を立てて消えて行くのが解った。

睡眠とは現実との別れ（後書き）

いやあ、なんか筆が進みますわ・・・。

感想くれちゃったその2501さん（神様第一号様）！

マジであります。

いやあ、感謝カングキ雨霞。

たった一人の感想で投稿する予定のなかったここまで投稿しちゃいました・・・。

2501さんって作者に対して魔法が使えたのね。

感想という魔法で作者が休みの日に2話も出せるようにするなんてほんとに何者ですかっ！？

全くリアルは魔法に満ち満ちていますねえ。

（痛い文句ですよね、わかってます。でも感情が高ぶって止まらないいいいい！！）

なんていう冗談はさておいて。

感想、誤字脱字、誹謗中傷、矛盾点等々、2501さん（神様第一号様）みたいに待ってますのでよろしくです。

隔離されし人間（ヒト）（前書き）

なんかみんなが見てくれてるようなのでちょっと早めに投稿しちゃマス。

隔離されし人間（ヒト）

なんかよく分からんが、起きたら周囲が真っ白な世界になっていた。

・・・あれ？俺って布団で寝てなかったっけか？

寝ぼけつつもそんなことを思う。

そして見渡す周囲の光景。

360度果てしなく白い世界。

今、足をついてる硬い地面も真っ白。

しかもここは地平線が見えるほどの広さを誇っているようだ。
別に暗いわけではないのだ。

白色電球のような光っているのか、これはなんなんだろうか。

天使の後ろに描かれるような光？みたいなので周囲全部が均一に照らされている。

・・・てか、眠い。

夢っていうのは訳もなく、好きなことのデートだったり怪物に襲われるのだったり、色々と見るのだからこれくらいじゃ驚かない。

だが、ヒジョーに眠い。

夢の中っていうのは大抵活発に動き回れると思ったんだが・・・。

なんでこんな眠いんだ？って言うほど眠い。

夢の中で眠さを実感できるとかこっぴついうこともあるんだな！。

なんて事を思いつつ、何かをしようという気は全く起きない。
だって夢なんてそんなもんだろ？

全く何もしない夢もあれば、自分がありえないような動きをするヒールみたいな夢もあるわけだし。

何も起きない状況であれば動く必要がないじゃん……。

夢の中でこんな事考えられる俺っていいかなものかと思わないでもないけど。

起きるまで待つてりゃそれでOK、OK。

ということであぐらかいて待機。

[illegible]

あれ？

おかしいな。なんかおかしいよ。

なんかあぐらかいて座っていたらうつとしてたと思ってたら、
 ちゃんと頭がはつきりしてきた。

なんだ？

この状況？

夢ってここまで頭がはつきりするものなのか？

ていつか俺が起きた時間から余裕で1時間は経ってないか？

いくら寝起き悪い俺でも解るぞ。

これはなんかおかしいって。

だって夢ってここまではずきり時間を意識することって無いもん。

なかよく分かんが、あぐらをかいたままキョロキョロする俺。

・ ・ ・ いやあ、こんな真つ白な世界は夢か ・ ・ ・ 。

きっと中途半端な悪夢だな．．．。

微妙にベットの上的俺とか、うなされてそう。

ふふふふ。あ、なんかおかしくなってきた……。

一人で考え事して一人でニヤニヤしてるとか痛すぎる……。

「やつほー」

「うつ？」

ビクツとしつつも反射的に立ち上がる俺。

真後ろのちよつと上の方からいきなり声かけられた。

そりゃ驚くよね。

痛い子だつて自覚してる時に後ろから声かけられるとか。

まあ、変な声だしてしまつたのはしょうがあるまい。

誰だつてそくなるさ。

つて誰に言い訳してんだ？俺は・・・。

頭を振つて声のした方へと振り返る。

・・・

・・・

・・・

・・・天使？かなあ？・・・

・・・

・・・うーんと・・・あ、痛い子が。

「痛い子じゃないよっ！！」

「ふえっ！？」

なんか変な声出た。

ていうか頭に金つていうのか黄色つていうのかわからないけれども、何か真ん中をくりぬいた円盤的なものを浮かべて、白い羽毛で覆われた翼を背中で羽ばたかせている、まんま天使みたいな格好をしている8歳？うーんと・・・10歳いつてるようには見えないよな・・・女の子に、叫ばれた、つていうのか頭の中を読まれた？気のせいだよな。

「・・・痛い子じゃないのか・・・じゃあきつと小学生だろうなあ、親はどこだろ？」

「痛い子でも小学生でもないよっ！？私はこれでもれっきとした神様なんだけどっ！？」

「はい？あーはいはい。神様ごっこね。お疲れさん。じゃあ神様、俺をベットのの上に戻しといてくださいね」

「そっういつつ寝転がる。」

「あーやつば夢だったのか・・・。」

「それはできませんし、夢でもありません」

「・・・はい？」

「思わず、考えを読まれたので天使ちゃんを見あげてしまっ。」

「貴殿は、＜佐々木 レオ＞ですね？」

「・・・はい」

「では、業務連絡をお伝えします。貴殿、＜佐々木 レオ＞殿は死亡が確認されたためにこの世界へと来ました。」

「・・・はい？」

「ここは死後の世界って奴なのですっ！！」

隔離されし人間（ヒト）（後書き）

仕事行く前に投稿するから後書きかいてる時間なかったり微妙にあったり。

でも忙しいのにいそいそとみんなの期待に答えようとかいてる作者・・。

ああ、でも忙しいいいい。

というだけの夢を見ました。

（夢オチかいつ！！ってツツコミはなしで・・・）

夢

「ここは死後の世界って奴なのですっ!!」

手をまつすぐにコチラへと指さして、もう片方の手を腰に当てながら、『ドーン』とか効果音でもつけたほうがいいんじゃないかっていう感じで言われた。

もう、それはほんとにもう、小さい子が自慢気に自分のコレクションを友達に見せびらかせて、どうだー!! 的な感じで言ってるように・・・微笑ましい。いや、ある意味萌えるわ、これ。

あれ? 俺ってロリって別にスルーできるタイプの人間だったはずなのに? あれ? このちっちゃい子によって目覚めちゃった? うふふ・・・

「ひいっ!!? なんてこと考えてるんですか気持ち悪いです死んでください死んでください死んでください!! ていうか近寄らないでください近寄ったらあなたの臓物ぶちまけてやりますから神様権限使ってあなたをゴキブリのように潰してやりますからされたくないかったら近寄らないでくださいっ!!!」

「・・・・・・・・」

なんか、息継ぎもせずに一言喋るたびに少しずつ後ろへと後退していく、空に浮かぶ10歳未満の自称神様少女に、そんなことを言われた。

・・・

.....

.....やばい、これはちょっと嬉しいかも。

「ッ！！？いいいいいやああああ！！！！！」

なんか後ろを向けて羽をバタバタとばたつかせてものすごい勢いで逃げていく神様。

「ッ！！？待て待て待てッ！？」

手を伸ばして全力で走りだす俺。

幼女な神様が必死で空を飛んで逃げていたにも関わらず、僅か10秒ほどで追いついた。

そのまま地上へと引きずり下ろし、自分の体の下へとねじ込んで動けなくした。

体格の差がいかにともしがたいものがあつた。

そのまま羽を無理やり抑えつけて説得にかかる。

「待て待て！！誤解だ！！別になんにもしないからっ！！！」

「離せエエエ！！触るなアアアア！！！！私は神様だ、頼むから犯らないでくださいいいいい！！！」

「いや、だから人の話を聞けっ！！！」

「離せエエエ！！触るなアアアア！！！！離せエエエ！！触るなアアアア！！！！」

「だから.....」

ずっとこんな感じ。この神様人の話を聞きやあしねえ……。あ、そうだ。いいこと思いついた。こうしてみよう。

こいつ、人の話聞かないんだったらマジで……。犯っちまおうかな。

ピタっ……。

急に体の下で動きが止まり、静かになったので見下ろして聞いてみる。

「俺の話、聞いてみる気ある？」

「……はい、そうさせて頂きます」

こうして俺と神様の対話が始まった。

とりあえず、体の下から幼女を引っ張り出し、真向かいに座らせた。

「……あのさ、色々聞きたいことあるんだけど、もしかしてお前って俺の頭の中、読めんの？」

「お前って酷くないですかっ！？私はこれでも神様なんですよっ！？」

うわ、こいつ、ソコにツッコむのかよ、めんどくせー。

「面倒くさくないですっ！！それにツッコんじゃいけないんですか

っ!?

「お。頭の中読めるっていうのは薄々気付いてたけど、ホントみたいね」

「わ、私を騙したんですねっ!？」

別に騙してねえし。ただ、確認しただけだし。そういう早トチリなところ、可愛いなあ!もうっ!!

「ひえっ!？」

「あー、襲わないから別にキシナイキシナイ。ていうか動いたら襲っちゃうよ?獣の本能的なアレで、動くものに襲いかかっちゃうよ?」

「ひうっ!?!動かない動かない動かない私は石像石像石像……」

ブツブツ言いながら固まった。

さて、こいつの行動は放っておこう……。

「……それでさ、さっき死後の世界って言ってたじゃん?あれはどういうこと?」

「ふえっ?まさか、死んだことに自覚がない感じですか?」

「……はい?」

「えっと、火事で死んだのですが、それについて全く覚えておりま

せんか？」

「・・・ええつと・・・火事？・・・なんのこつちゃ？」

「・・・ほんとに覚えていないの？」

キョトンとした目でこちらを見つめてくる。

こちら覚えはない。はつきりと頷く。

「・・・え？あれ？おつかしいなあ・・・でも？・・・まさか・・・？・・・あ、もしかして？」

なんか幼女が顎に手を当てて、首をかしげつつもブツブツとつぶやきはじめた。

「・・・そんな仕草もめっちゃカワイイなあ・・・あれ？そういやあ・・・こいつってなんなんだろう？なんか可愛い幼女（自称神様）？なんか夢みたいだ。でも夢じゃない様な気がする。

勘だけど、そして雰囲気みたいなものがだけど、これは夢ではないって告げてきている。

ていうか夢であって欲しくないって俺の本能が告げてる。

こんな可愛い子と一緒に入られる時間は少ない、と。

だったらもしかすることもある。

よし、とりあえず聞いてみよう。

「あのさ、お前っていうのもアレだしさ、それにお前だけ俺の名前知ってるっていうのもアレ、・・・っていうのかなんか不公平だし、その、名前教えてくれない？」

「あれゝ？きつと知ってると思ったんだけどなゝゝゝでもどうしよう？消されちゃったのかなあ？うゝゝゝんゝゝゝ」

「．．．はい、全く聞いてなかった。人にどう思われてるかは知らないけど、自称人見知りのこの俺が勇気振り絞って聞いてやったのに．．．」

こいつ、もう一回聞いて答えなかったら、身体中、舐めまわしてやる。

「ひいつ！？私の名前は有りません！！はじめから言っているとおり神様って俗称があるだけなんです！！だからさわらないで近づかないでっ！！」

「．．．ふうゝん。ていうか名前自分で考えたりしたこと無いの？」

「．．．自分で考える？そんな事する必要あるの？」

「．．．え、だって不便じゃ、」「あなた勘違いしてるわよ」

言葉を途中で遮られる。しかもとびきり上から目線で。

「．．．はい？何を、．．．でしょうか？」

だから俺が素で受け答えしていたのに、丁寧語になってしまったのも致し方あるまい。

この幼女が凄むと怖いものがあるのだ。

「何をつて、もともと私はあなたの中にしか存在していないもの」

夢(?)

「何をつて、もともと私はあなたの中にしか存在していないもの」

「ええつと、神様？言ってる意味がワカリマセン」

そこで幼女な神様は困った顔をする。

やべ、その顔も可愛いなあ。

「・・・」

・・・あれ？なんで俺の思考に反応しないんだ？

「あ、ちょうどいい、それを具体例に出してみましようか」

あ、聞いてたんだ・・・。

「私がああなたの頭の中が読めるのは、あなたの想像がこの世界を形作っているから、つまりはあなたの考えたことは世界の一部として存在するってことになるので、私に、いえ、私の頭の中にダイレクトに伝わってくるのです。不本意ですけど」

「え？何？じゃあ俺がこの世界の王様つてこと？ていうか最期にぼそつと言ったのは何？」

「まあ、あなたが王様かって言われますと違いますけれども、ここはあなたの妄想であり、無意識下で想像している死後の世界そのも

のといつても過言ではないのです。そして私もあなたの妄想そのも
と言つても間違えではないのです。つまり言い換えればこの世界の
みに存在する神様といつても問題ないかと」

「え、無視？ねえ？無視なの？・・・まあいいや、つまり、俺が神
様とか、死後の世界ってこんな感じかな？って無意識に思ってるか
ら幼女なあなたが出てきているって事？それって今、俺がこんな感
じで有って欲しいって思えば姿形とか、この周りの殺風景とかも変
わるってこと？」

「いや、それは変わらないのです。変えようがありませんわ。不
可変な事実として、私はこの姿のままでしか存在できません。ただ
し、こうして私が口調を変える位の事は出来るんですよ。私の
意思でだけだな」

「いや、一つのセリフの中で口調が変わりすぎて気持ち悪いから。
それに最期にぼそつと言った、お前の意思でつてことは別に俺がそ
う望んだからそうなったってわけじゃないじゃん！詐欺じゃん！！」

「つまるところ私は姿形を変えることはできないってことです（笑）
」

「いや、最期の（笑）って何！？（笑）じゃなくて悪魔の微笑みだ
つたよね！！？」

「ていうかあなた気持ち悪いです」

「いやいやいや、そこボソツと何言っちゃってんの！？神様なんで
しょ！？俺のこと助けようぜ！？なんで思いつきり心握りつぶして
くれてるんですか！？」

「はつきり言えばそういうところが思いっきり気持ち悪いです」

「いやああああ！！？そんな大声で幼女の姿でズバッと指摘しないでええええええ！！」

ここまで俺はギャグのノリで話に乗っていた。だって妄想とか無意識化で作られた世界とか意味分からんし。ネットでしゃべっていたノリで喋るリアルな機会なんて一切なかったからな。ちよつと楽しくなってノツてみた。

「閻魔大王とか呼ばれている奴を超える気持ち悪さです」

ここからは驚いてマジで素で聞いてしまった。

「・・・え？何？閻魔大王とか知ってんの！？」

「当たり前です。なんといっても私は神様ですから」

「・・・ていうか、その神様っていうか、これ俺の妄想なんじゃないの？」

「何言ってるんですかコイツ。神様なんだから人間一人くらいの妄想に入ることできるに決まってるじゃないですか、そんなこともわからないとは流石今まで女子に囲まれてるにもかかわらず決まった女子を持たずに更にはリアル友達すらつくらずにネットの世界に溺れてそのせいで昼間に起きた火事にすら気付かずに寝ぼけていた最低の顔だけ男ですね。顔だけに惹かれていた女子が可哀想すぎです。気持ち悪っ」

「……え？何？俺、神様に悪いことした？ねえ？なんかものすごく傷つくんだけど、事実だけに」

ここで神様が真上を見上げる。釣られて上を見上げる俺。

3秒ほどだろうか、こっちに目を戻す幼女な神様。

視線を戻す俺。

目が合う。

唐突に神様はこういった。

「真似しないでください、人間のゴミが」

……ヤバイっす。この幼女姿で上から目線（実際に飛んでるから上から目線）で凄い目つきで見下されて罵詈雑言とかゾクゾクしちゃ、

「ざけんなあああああつ！！！！オラアアアアアアアアアア
！！！！！！！！」

「ぐぶふうっ！！？」

幼女な神様は5m程前方、俺の目線のちょい上あたりに浮いていたはずなのに、一瞬で間合いを詰められて腹部を蹴り飛ばされた。

ていうか、登場時と打って変わってキヤラ変わってないか？こいつ・

・

まあ、今回は意識して、こいつがどんな反応をするかと思って言葉で考えてみたら蹴り飛ばされた。痛え……。

「あ、ちよつと無駄な時間を使いすぎましたね、ゴミごときに」

俺は10m程離れた所でうずくまっていたのだが、（あ、神様に蹴

り飛ばされてそこまで飛んだらしい）神様は何事もなかったように昔よくあったような鎖のついた金時計みたいなのをみて、そうつぶやいていた。

俺はゆっくりとダメージを緩和しつつも立ち上がる。

「ところで佐々木 レオさん、あなたはまだ生きていたいのですか？」

立ち上がった所でかなり真面目な顔、真面目な声でこう問われた。

「・・・生きていたいも何も、俺は死んだ実感すら無いし、どうして死んだかも知らないし、それにこれが夢であることも疑っていない。夢にしちゃ腹がめっちゃ痛いけど」

「あなたは確実に死にました。死んだ理由は4人いたうちのテントに泊まっていた男子生徒が、3人の女子生徒は起こそうとしてたのに、自分は全く起こされなかったからという理由で10時頃に放火、12時頃に家が全焼したからです。更にはこの世界は先程も言ったとおり現実であり、あなたの妄想ですので」

「・・・はい？え、え、ええ？ちょちょちょ、ちよつとまってくれ。俺の死んだ理由はなんだって？え、放火？え、うん、まあ、それはいいでしょう。良くはないけど受け入れることとしよう。え、それで何？起こしてくれなかったからって男子生徒が放火？え、それはちよつと、」

「あ、ちなみに放火した男子生徒は所謂、暴走族のトップ&オカマつてやつです」

「・・・・・・・・・・・・はいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii????????」

「あ、あともう一つ。ご家族は出かけており誰も居なかったので死亡者はレオさん、あなただけということになります」

「・・・あ、ああ」

「まあ、実のことというあなたはまだ完全に死んだわけじゃないみたいなんですけどね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4031ba/>

パーティ組んでるのになんか色々偏っちゃうことってあるよね

2012年1月14日21時51分発行